陶淵明の「勧農」詩と農家思想

上田　武

一　はじめに

小論は陶淵明の全作品を詠懐詩と田園詩とに大別した場合[1]、田園詩に属する巻一・詩四言の「勧農」詩の構成、表現の特徴と、その基盤をなす思想について、若干の検討を試みようとするものである。

「勧農」詩に注目するのは、第一に淵明が中国文学史上未曾有の分野を開拓していった田園詩のほとんどが、みずからの農耕体験に基づいて制作されているのに対し、この作は、士人の立場から、「勧農」という、一般農民に勤労を勧める特殊な主題についての作者の観点を述べることに終始し、むしろ躬耕を開始する以前の、彼の生きる姿勢の一面をうかがうに足るものだからである。また第二には、この詩の論旨の展開が、終末部において、奇矯ともいえる屈折を示し、作者の意図を改めて検討する必要を痛感したためである。

「勧農」詩の基本的性格については、日、中の注釈書に、「陶淵明の重農主義をうたうもの」「農本・重農の思想を表す作品」といった説明がしばしば見られる。淵明が田園生活と並行して、農業労働に手を染め、それが全く新しい文学の視点を精神の内部にはぐくんでいったのは疑うことができない。ただ「勧農」詩は躬耕経験以前の、別な次元で生み出された作品であり、その契機の一つとなったのが、中国古代にあって、農業の重要性を強調した思想運動、すなわち諸子の「農家」思想との出合いであったと想定されるのである。だが管見の及ぶ限りでは、近、現代の学界で、両者を関連付けた指摘は、郭維森・包景誠共著『陶淵明集全釈』（貴州人民出版社・一九九〇）題解の、「初めの二章で、遥かな農耕の歴史の描写と、諸子の農本思想が結合された」という記述以外、まだなされていないようにみえる。

小論はまず先秦から前漢にかけての農家の傾向を跡づけたうえ、「勧農」詩の(6)章をどう位置づけるかという順序で考察を進めてゆくこととする。

二 『漢書』芸文志における「農家」

先秦時代から漢代への農家の理論活動について、当事者による直接の文献は残されていない。数少い残簡が先学によってそれと指摘されている程度である。ただ『漢書』巻三十・芸文志十の諸子十家の一隅に、大よその輪郭を示す形骸を見ることはできる。それによれば、おそらく戦国期から始めて前漢に至る農家の書籍は九家百十四篇が数えられる。その目録を時代毎に整理すれば次のようになる。

A戦国～(1)『神農』二十篇（諸子疾時怠於農業、道耕農事、託之神農。）(2)『野老』十七篇（在斉楚之間。）

B前漢～(3)『董安国』十六篇（漢代内史、不知何帝時。）(4)『氾勝之』十八篇（成帝時為議郎。）(5)『蔡癸』一篇（宣帝時、以言便宜〈国家の利益となる提案〉至弘農大守。）

C時代不明～(6)『宰氏』十七篇　(7)『尹都尉』十四篇　(8)『趙氏』五篇　(9)『王氏』六篇

目録の末尾には、芸文志編者の自注が付されている。そこでは、農家に二つの傾向のあったことが知られる。次のⅠは学派の主流であり、注者から見て評価に値するもの、続くⅡは学派内の異端として否定されるべきものとされている。

Ⅰ「農家者流、蓋出於農稷之官。播百穀、勤耕桑、以足衣食、故八政[2]『一曰食、二曰貨』。孔子曰、『所重、民・食〈論語・尭曰第二十・旧注の解〉』。此〈技術的な方策を提案して民生に役立った点が〉其所長也。」Ⅱ「及鄙者為之、以為無所事聖王、欲使君臣並耕、誖上下之序。」

Ⅰの「農稷之官」は農業の管理指導の役人を指す。大島利一「神農と農家者流」（『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』一九五〇）によれば、彼らは一般農民よりも優れた農業知識の所有者であった。春秋から戦国にかけての、鉄製農具や牛耕の開始、施肥、耕作法の改良発達には、西周以来の彼ら農稷の官の伝統的な知識が大きくあずかっていたと想定されている。北魏（後魏）末の賈思勰『斉民要術』（六世紀前半成書）にしばしば引用される、芸文志目録(4)『氾勝之』の区田法は、近代まで中国農業に影響を与えた耕作地利用法とされるが、それもかかる改良的官僚農業技術者の画期的な成果と見なされている。これに対し、芸文志自注Ⅱの、「鄙者（賤しく頑なな者）」が農家の学を修めた場合、

新たな聖王出現の必要性を認めず、君臣並耕を主張して、上下の身分秩序を混乱させるという記述について、大島氏は孟子（前三七二?～二八九）の時代に古代の聖人神農の教えを標榜して抬頭してきた、いわゆる神農派を指しているとする。『孟子』滕文公・上に登場する楚出身の許行と弟子陳相（宋人）は、その派に属する者として記録に名をとどめる唯一の存在である。彼らは出身地や階層からして、まさに草莽の民に外ならなかった。陳相が君主たるものはみずから鋤鍬を取って農民と共に耕作に励まなければならないという、文公批判の議論を突きつけたのに対し、孟子は人間には立場資質によって分業がある（有大人之事、有小人之事）。「或労心、或労力。労心者治人、労力者治於人。治於人者食人、治人者食於人、天下之通義也。」という有名な主張によって反論している。

君臣共耕を核とする神農派の思想活動は、戦国の動乱のさ中、国家権力の収奪による一般人民の困苦を救済しようという理想性と、さまざまな薬剤の発見を通しての、医療技術の開発とあわせて、秦漢革命時における諸派への影響力はかなりに大きなものがあったと見なされる。

なお陳相らが自他ともに「神農派」と称していたことに対し、芸文志自注における主流派の残簡には、舜の農官である一方、周王朝の祖とされる后稷のことばが、いくつか引用されている。大島氏は彼らを「后稷派」と呼ぶが、小論でも以下大島氏の呼称を援用してゆくこととする。

三　戦国・前漢期の諸子文献における農家の残簡

以上先学の成果を踏まえて農家内の二流派の輪郭をたどってみたが、本章では、両派の比較的明らかな残簡例を最小限に絞って引用してみたい。

まず后稷派の残簡は、『呂氏春秋』最終部の以下の四篇のみが指摘されるだけである。

(1)巻二十六・士容論第六「上農（農業の重要性）」(2)同上「任地（農地の土質の利用法）」(3)同上「弁土（土壌の弁別）」(4)同上「審時（作物と時節の関係の判断）[3]」

これらのうち「任地」の冒頭で、后稷自身が「子能以窪（窪地）為突（高地）乎（あなたは田畑の窪地に土盛りをし、作物栽培ができるか）。」「子能蔵其悪（堊）而揖之以陰乎（あなたは乾いた白い土〈石灰質の土〉を埋め立てて湿潤な土壌を集めることができるか）。」といった技術的な設問十項目をあげ、「任地」の後半および「弁土」「審時」で、后稷の問いへの解答がなされている。つまり三篇一続きのまとまりを持った内容である。現在まで伝えられるこ

の文献の四分の三以上が技術面での系統的な記述で占められている点に后稷派の特徴がよく表れている。

この派の農政問題の主張は、「上農」の前半部分に要点が記されている。

古先聖王之所以導其民者、先務於農。民農非徒為地利也、貴其志也。民農則樸、樸則易用、易用則辺境安、主位尊。民農則重、重則少私議、少私議則公法立、力専一。（中略）后稷曰、『所以務耕織、以為本教也。』是故天子親率諸侯耕籍田、大夫士皆有功業。是故当時之務、農不見於国、以教民尊地産也。（後略）＝古先聖王の其の民を導く所以は、農に務めしむるを先とす。民の農すは徒だ地の利の為に非ず、其の志を貴ぶなり。民農さば則ち樸たり、樸たらば則ち用ひ易く、用ひ易くば則ち辺境安らかにして、主位（君主の位）尊し。民農さば則ち重かなり、重かならば則ち私議少く、私議少くば則ち公法立ち、力一（農耕の一点）に専らならん。（中略）后稷曰はく、『耕織に務めしむる所以は、本を為すを以て教ふるなり。』是の故に天子親ら諸侯を率ゐて籍田を耕し、大夫・士は皆功業（地位に応じた人民を指導する職務）有り。是の故に当時（農繁期）には之れ務め、農（農民）をして国（国都）に見はれざらしめ、以て民に地産を尊ぶを教ふるなり。（後略）

后稷派の農政の基本的立場は、農民の全力を農耕労働の一点に集中させることにあった。農耕に心身のすべてを集中することによって、民は素朴従順となり、君主の地位は安泰となるという論旨は、法家や道家の発想の雑糅の上に組み立てられたものであることを予想させる。

一方神農派の残簡は次のように各派に分散している。[4] (1)『管子』揆度篇 (2)『呂氏春秋』愛類篇 (3)『淮南子』主述訓 (4)同・斉俗訓 (5)『漢書』食貨志・上・鼂錯上表

ここでは『淮南子』巻十一斉俗訓に引かれた『神農』の断片と、それを敷衍した『淮南子』当該部分の筆者の文章の一部を鈔写しておく。『淮南子』の本文をも引用したのは、それが陶淵明の「勧農」詩と一定の関連性を持つと認められるからである。

神農之法曰、「丈夫丁壮而不耕、天下有受其飢者。婦人当年而不織、天下有受其寒者。」故（神農は）身自耕、妻親織、以為天下先。其導民也、不貴難得之貨、不器（道具として使わない）無用之物。是故其耕不強者（つとめない者）、無以養生。其織不力者、無以揜形（体を覆う）、有余不足、各帰其身。衣食饒溢、姦邪不生。安楽無事、而天下均平。（中略）衰世之俗、以其知巧詐偽、飾衆

〈多くの〉無用、貴〈貴ぶ〉遠方之貨、珍難得之財、不積養生之具、澆〈うすめ〉天下之淳、析天下之樸、牿服〈おりに入れ〉馬牛以為牢、滑乱万民、以清為濁、性命飛揚、皆乱以営〈まどい〉、貞信漫瀾、人失其情性。

神農は伝説では后稷より遥か昔の聖王とされ、その主張も君臣共耕、天下均平の素朴な共産社会を柱とするが、『孟子』に登場する許行や陳相の発言、出身地やいでたちなどから、戦国半ばの混乱期の地方農村を背景に発生した民衆の思想と見られる。君臣共耕の空想性や薬草を中心とする病気治療等で、諸子各派に影響を与えたものであろう。しかし秦漢統一帝国の成立過程で、官僚的主流派に次第に吸収され、[5]南北朝を経て、『隋書』の編纂された唐初には、学派的性格は消滅し去っていたことが、経籍志などから跡づけられる。[6]四世紀後半から五世紀初めにかけての陶淵明の時代には、技術面を中心に后稷派との混合が加速されていたことが推測される。[7]

四「勧農」詩の構成

以上諸子農家の輪郭を概観したが、陶淵明の「勧農」詩が、それとどのように交差するか、作品に即して検討したい。

(1)悠悠上古　厥初生民　悠悠とはるかなる上古　厥の初めに生れし民

傲然自足　抱樸含真　傲然とほこりやかに自足し　樸を抱き真を含む

智巧既萌　資待靡因　智巧　既に萌すや　資待　因るところ靡し

誰其贍之　実頼哲人　誰か其れ之れを贍らしめし　実に哲人に頼る

(2)哲人伊何　時為后稷　哲人とは伊れ何ぞ　時れ后稷為り[8]

贍之伊何　実曰播殖　之れを贍らしめしは伊れ何ぞ　実に曰れ播殖す

舜既躬耕　禹亦稼穡　舜　既に躬耕し　禹も亦稼穡す[9]

遠若周典　八政始食　遠く周典に若はば　八政は食を始めとす

(3)熙熙令徳　猗猗原陸　熙熙とかがやく令き徳　猗猗としてうるはしき原陸

卉木繁栄　和風清穆　卉木は繁り栄え　和風は清やかに穆ぎ

紛紛士女　趨時競逐　紛紛とむれつどふ士女は　時におくれじと趨りて競ひ逐ふ

桑婦宵興　農夫野宿　桑つみ婦は宵より興き　農夫は

(4)気節易邁　和沢難久
冀欠攜儷　沮溺結耦
相彼賢達　猶勤隴畝
矧茲衆庶　曳裾拱手
(5)民生在勤　勤則不匱
宴安自逸　歳暮奚冀
儋石不儲　飢寒交至
顧爾儔列　能不懐愧
(6)孔耽道徳　樊須是鄙
董楽琴書　田園不履

野らに宿る
気節は邁ぎ易く　和沢のかぜと
あめは久しきこと難し
冀の（郤）欠は儷を携ひ（長）(10)
沮（桀）溺は耦を結ふ(11)
彼の賢達を相れば　猶ほ隴畝に
勤しむ
矧んや茲の衆庶よ　裾を曳きて
手を拱かんや
「民の生は勤しむに在り　勤し
めば匱しからず」と(12)
宴しみ安んじて自ら逸なれば
歳の暮には奚をか冀はん
儋石をも儲へざれば　飢ゑと寒
さは交ごも至らん
爾の儔列を顧みれば　能く愧を
懐かざらんや
孔は道徳に耽り　樊須をば是れ
鄙しとなす
董は琴書を楽しみ　田園をば履
まず

若能超然　投迹高軌　　若し能く超然として　迹を高軌
に投ぜば
敢不斂衽　敬讃徳美　　敢へて衽を斂へて　敬みて徳の
美を讃へざらんや

「勧農」詩は全体として三段に分節できる。第一段は伝説的な古代に播種を教えた后稷や、躬耕で範を垂れた舜や禹によって、農民が生き生きと仕事にいそしむ姿をうたった(1)(2)(3)章、第二段は時が下った乱世の春秋で、黙々と隴畝で働いた冀欠や沮・溺を引いて、「民生は勤むることにある。勤労すれば貧窮する事はない。」と厳しく訴えた(4)(5)章である。しかし第三段(6)章となると、こともあろうに孔子と董仲舒という大人物が農作業を蔑視あるいは無視した事実をあげ、労働が天職の農民でも、この二人の生き方に追随できるなら、自分は賛美を惜しまないという奇妙な結語で締めくくられる。

(6)章をどう理解するかについては、最後に補説としての分析を付加したいが、小論の主たる課題は第一、二段の検討によって、一定の見解が導き出せるものと考えられる。

五　「勧農」詩と農家思想

「勧農」詩第一、二段の論旨は、後述のように神農派的

な要素をも含みながら、基本的には后稷派（官僚的主流派）の立場が中心を占めていることは明らかである。「勧農」の主題の重点は、(2)、(5)章にうたわれているが、(2)章は農業を最優先する歴代聖王のいとなみを羅列し、末尾は『尚書』洪範・八政の「一曰食」で集約される。(3)章の農民の生き生きとした農作業の描写は、前章の為政者たちの成果に外ならない。また(5)章では(4)章の世に隠れた賢達の姿を前提にし、目の前の農民たちに勤労の訓戒が熱をこめて強調されている。これら詩の中心部において指摘しなければならないのは、淵明がごく自然に権力の側に立って発言している点である。田の草取りでも夫婦の礼を貫き、晋の文公に抜擢された冀の郤欠は、襄、霊、成公四代三十年にわたり、卿として国の政治を支えた。「民生在勤云々」の格言は、楚の荘王が国力を高めるため、常に臣下人民に説諭していたものである。また「矧」「奚」「能不」三箇所の強い調子の反語も、上から下に圧力をかける、いわば官僚的もの言いと読み取ることができる。

「勧農」ということばの最初の用例は、前漢文帝十三年の詔勅（『史記』巻十・孝文本紀）に見える。以後成語「勧農」はお上が農民を督励する場合にのみ用いられてきた。隠逸の道を踏み出す以前の淵明が、お上の側に身を置き、農作業に携わった経験を持たなかったことは、「癸卯歳始春、懐古田舎」詩其一の「在昔聞南畝　当年竟未践」が率直に語っている。みずからの体験と無関係に、農民に勤労を勧めるこの詩の制作が、癸卯（四〇三・三十九歳）よりかなり以前であり、当時の淵明の主要な関心は、官吏就任による政治参加に置かれ、隠逸、躬耕はいまだ当面の課題になっていなかったのは明らかである。

ただそうではあっても、(1)章でうたわれる悠遠の太古、自然と融合した純真な生き方をしていた人間が、時とともに堕落の一途をたどってきたという歴史認識は、前出の『淮南子』斉俗訓と重なることから、農家神農派の発想に基づくものであり、しかも彼の精神の内奥に深く根を下ろしていたことは、以下の諸例からも具体的に裏付けることができよう。すなわち「五柳先生伝」の「無懐氏之民歟、葛天氏之民歟」、「戊申歳（四〇八）六月中、遇火」の「仰想東戸時　余糧宿中田　鼓腹無所思　朝起暮帰眠　既已不遇茲」、「飲酒」其二十の「羲農去我久　挙世少復真」その他である。また(4)章の長沮、桀溺に対し、淵明は「庚戌歳（四一〇）九月中、於西田穫早稲」で「遥遥沮溺心　千載乃相関」、「扇上画賛」其二で「遼遼沮溺、耦耕自欣、入鳥不駭、雑獣斯群」と敬慕の念を表明している。右の二つの

心情は、環境や立場がどう変わろうと、若い頃から人間陶淵明の中核に牢固と根を張り、官位を捨て、隠士への道を選択させるエネルギー源の一つになったものといえよう。

六　補説・第三段落（(6)章）をどう読むか

「勧農」詩の論旨の展開は、前述のように、(6)章に至って大きく屈折する。転換を印象付ける第一は、はじめの四句において、それまでの人物たちとうって変わって、孔子、董仲舒という二人の偉人の、農作業に対する蔑視や無関心さがあらわにうたわれる唐突さである。董子の場合は、学問に沈潜したための無関心さに尽きるが、[13]孔子の言動は思想の本質にかかわることがらであり、ゆるがせにはできない。出典本文は次の通りである。

樊遅請学稼。子曰、「吾不如老農。」請学圃〈菜園作り〉曰、「吾不如老圃。」樊遅出。子曰、「小人哉樊須也。上好礼、則民莫敢不敬。上好義、則民莫敢不服。上好信則民莫敢不用情〈まごころ〉。夫如是、則四方之民、繦負其子而至矣。焉用稼。」（『論語』子路第十三）

問題は稼圃を学ぼうとした樊須に「小人だ」と儒家として最も厳しい批判を加えた孔子の真意を、淵明がどう受けとめているかにある。古来何晏の『集解』、朱子の『集註』など[11]当然のことながら、経世の視点から樊遅が孔子の立場を理解できないことを指摘してきた。「勧農」詩のこの問題に関する唯一の専論である松浦友久氏の「陶淵明の『勧農』詩について――知識人社会における『憂道』と『憂貧』」（『中国詩文論叢』第十八集、一九九九）も、「（孔子の）厳しい樊遅批判は、農民や一般人が農耕することへの批判ではなく、学問・政治に専心すべき儒家的知識人が躬耕すること、それによって知識人の本分に専心できなくなること――への批判だということである。」と同様の角度からのコメントを付されている。

(6)章の後半四句について、小論は「奇妙な結語」と形容したが、孔子の樊遅批判を肯定した立場からすれば、当然(6)章は「勧農」詩全体の論旨を屈折させながらも、その主題を補強する役割を果たしているという見方をとることになろう。前近代の読書人たちはその点から、さまざまな解釈の工夫を試みているが（詳細は松浦論文第三章参照）、やはり相当の無理を避けざる得なかったことが見てとれる。そこでの最大公約数的な解釈は、「言外に勧農の意味がこめられている」とするものである。代表的な例として清の沈徳潜は『古詩源』巻八で次のようにいう。「言、能如孔子・董相、庶可不務隴畝耳。勉人意、在言外領取。＝言わ

んとするのは、孔子や董丞相のようにあり得たら、田畑で農作業にはげまなくてもさしつかえないということになるわけだ。(だがそんなことは考えられない。だからひとびとに農業に務めよという意味が言外にあると理解されるのである)」。現代でも例えば孫鈞錫『陶淵明集校注』(河南省新華書店一九八六)に見られるように、「言外の意」が重視されている。「如果有誰徳才過人、能像孔子和董仲舒那様投身于崇高的事業、我又怎敢不敬佩并称賛他的美徳。言外之意是、若不能如孔如董、那就必須従事労作。＝もし才徳が人より優れ、孔子や董仲如のように崇高な事業に全力を傾けられる人物がいるのなら、私にしろその人の美徳を敬服称賛せずにいられようか。言外の意味は、孔子や董子のようにあり得なかったなら、当然労働作業に従事しなければならないのだ。」

　先にあげた松浦論文は、表面的な言外の意にこだわるだけでなく、淵明自身の体験に即した精神の深みに迫ろうとする。そこで着目されるのは、「癸卯歳始春、懐古田舎」其二(全十六句)の冒頭四句「先師有遺訓　憂道不憂貧　瞻望邈難逮　転欲志長勤」と、その典故『論語』第十五衛霊公の「子曰、君子謀道不謀食。耕也、餒在其中矣。学也、禄在其中矣。君子憂道不憂貧」である(松浦論文四章)。淵明自身の体験と『論語』の前掲典故を踏まえた「癸卯歳始春」詩の当該部分から導き出されるのは、「憂道不憂貧」という先師孔子の生き方は、到底自分には逮び難いもの、そこでやむなく凡愚にふさわしい畑仕事に志すのだという結論である。ただ小論第五章で触れたように、「勧農」詩と「癸卯歳始春」詩とは、制作時期をはじめ多くの面で次元を異にしており、併せて論の対象とするのはいかがなものであろうか。

　以上のような(6)章が「勧農」詩の論旨を屈折させながらも、全体の主題を補強させる役割を果たしているという前近代からの多数解釈に対し、(6)章は(5)章までの論旨を切断し、それと対立する独自性を有するものだという読み方も存在する。例えば一海知義氏の「陶淵明の孔子批判」(『文学』第四十五巻第四号岩波書店一九七七)は、「(『論語』の子路篇の一文は)孔子の根源的巨視的観点を称揚するものとして、樊須とのエピソードを引く。(中略)だが淵明は、二つの(董仲舒との)エピソードを儒家の農業軽視、労働に対する蔑視としてとらえ、これを非難、批判する。淵明の孔子批判、また董仲舒批判は、きわめて直截である。(一章)」と指摘する。また(6)章後半の四句について、一海論文は次のように記す。「もしも俗事に超然とした、高尚

なこの方々通りのまねができるのなら、エリを正してその人格の立派さをたたえもいたそう。四句の大意は右のごとくであろう。とすれば、この結句は、直截な批判をやわらげる一定の留保でもある。だが、留保とはいい条、それはいわばシニカルな留保であり、淵明の孔子批判の態度は明快であるといえよう。（一章）」

(6)章についての小論の観点は、勧農の主題の補強という伝統的な位置付けではなく、(5)章までの論旨を大きくトーンダウンさせる、主題の展開に水をかけるはたらきをするものというとらえかたである。ただその調子は一海論文のいわれるような直接明快な批判ではなく、揶揄的で斜めの姿勢であるというのが結論である。一海論文では、孔子と仲如のエピソードを、「農業軽視、労働に対する蔑視」とするが、その理由は示されない。理由はやはり(6)章の用語、表現に求められなければならないであろう。淵明の九首の四言詩がすべて『詩経（毛詩）』の「嫡系」であることは、蕭望卿「陶淵明四言詩論」（『陶淵明批評』台湾開明書店一九七八・初版は一九六八）の指摘するところである。ここで注目されるのは、(6)章第一句「孔耽」の「耽」が、『詩経』はおろか『十三経』中、衛風「氓」の第三章にだけ用いられていることである。「士之耽兮　猶可説也　女之耽兮　不可説也＝士（男性）の耽るや　猶ほ説く（言い訳する・「鄭箋」は「説」を「解」とする）べきも　女の耽るや説くべからず」。「耽」を孔疏は「耽楽」という成語で敷衍するが、要するに恋にうつつを抜かす意味で、文人なら、この文字を見ただけで、「氓」を連想するのは必定である。「董楽琴書」の出典も、「楽」に相当する部分は、『史記』『漢書』ともに「其精（精励する、心を打ち込む）如此」と謹直な表現をとっている。このような(6)章前半四句の「耽」「楽」の用法、および後半四句において、文字などと全く無縁な農民が孔、董両夫子に近い教養や人徳を身に着けるという万に一つの可能性もない条件の仮定とをあわせ眺めた場合、淵明の姿勢がかなり不真面目な方向に傾いているといわざるを得ないであろう。要するに「勧農」詩は抱樸含真の太古の生活から説きおこしたひたむきな訓戒が、最後に至ってぼっきり折れ曲がった奇妙な印象を与えずにはおかない作品ということになる。淵明の詩の寓意を滔々と弁じてやまない明の黄文煥も、「勧農」詩については「情理深遠、釈其首尾、光怪万丈」（『陶詩析義』巻一）という嘆声を発している。

一作品の中途で、論旨が大きく曲折する破格の技法は、「勧農」に続く「命子」にも認められる。五言詩の見事な

成果に比べ、淵明の四言詩が、「停雲」「飛鳥」を除いて、『詩経』の陳腐な模倣であり、彼らしい創造性が希薄であると、厳しい評価を下す蕭望卿は[15]、厳粛荘重な名門陶家の歴史の回顧から、父親となった凡愚の情の吐露への「命子」の転調を容赦なく皮肉っている。[16] 州の祭酒として起家する以前、あるいは荊州の軍閥桓玄の幕僚として、江陵に赴く前の淵明には、寒門士族とはいえ、役所との付き合いは当然あったはずであり、座興か何か、「勧農」の詩を作らざるを得ない機会に面し、詠詩の中途でみずからの実感から離れた誇大な表現に気がさし、かかる転調が生じたのかも知れない。

（注）

①廖仲安『(中国古典文学基本知識叢書) 陶淵明伝』上海古籍出版社一九八一第八章「文学上の業績と影響」邦訳注・上田武『陶淵明伝―中国におけるその人間像の形成過程』汲古書院一九八七「題材と内容の面から、彼の詩は大よそ詠懐詩と田園詩の二種類に分けることができる。」の提起に基づく。なお詠懐詩と田園詩の特徴、相互の関係等については、田部井文雄氏との共著『陶淵明集全釈』明治書院二〇〇一の「解題」の「陶淵明の文学」の「詠懐詩の側面」「田園詩の側面」に見解を記しておいた。

②殷の遺臣箕子が周の武王に伝えた国家統治の八項の政治原則。(『尚書〈書経〉』巻十二周書・洪範)

③陳奇猷校釈『呂氏春秋校釈』巻二十六「上農」注[一]学林出版社一九九五

④筆者（上田）の調査の範囲による。

⑤『斉民要術』巻一第三「種穀」所引の『氾勝之』書の一節に「尹沢取減法、神農復加之、骨汁糞汁種種、剉〈砕く〉馬骨・牛、羊、猪、麋鹿骨一斗、以雪汁三斗煮之。（中略）**状如后稷法**、皆搜〈確かめる〉汁乾乃止。」とあり、后稷派が最もオーソドックスで、新興の神農派（およびおそらく尹沢〈尹都尉〉）はそれに追従していったことが読みとれる。

⑥『隋書』巻三十四経籍志・農者の目録五部十九巻は派の別はなく、すべて技術的、実務的な書物であると見受けられる。(『氾勝之書』二巻・漢議郎氾勝之撰、『四民月令』一巻・後漢大尚書崔寔撰、『禁苑実録』一巻、『斉民要術』十巻・賈思勰撰、『春秋済世六常擬義』五巻・揚瑾撰・梁有「陶朱公養魚法」「卜式養羊法」「養猪法」「月政畜牧栽種法」

目録の「自注」ではⅠ農政官の指導的な耕作法が法令として各地に徹底されるようになっていたこと。Ⅱ好ましくない傾向としては農作物の商品化が進んで、官僚による統制が混乱するようになってきたことがあげられている。

⑦淵明から約一世紀遅れた『斉民要術』の序の冒頭を見ると、以下のように、神農も后稷も同じ次元の存在として見られ、学派の別が意識されなくなっていたことがわかる。「蓋神農

為耒耜、以利天下。堯命四子（『漢書』食貨志に見える四人の有能な官吏）、敬授民時。舜命后稷、食為政首。禹制土田、万国作乂（治に通用）。

⑧后稷の播殖の指導（『尚書』舜典「帝曰、棄（后稷の名）黎民阻（なやむ）飢、汝后稷播時（ここに）百穀」）

⑨舜の躬耕（『史記』五帝本紀「舜耕歴山」・禹の躬耕（『論語』憲問第十四「禹・稷躬稼、而有天下」）

⑩冀欠携儷（冀はもと春秋の国名、晋に滅ぼされて邑の名となった。）（『左伝』僖公三十三年「臼季、使過冀、見冀欠耨。其妻饁之。敬、相如賓。」）

⑪沮溺（『論語』微子第十八「長沮、桀溺耦而耕。」）

⑫『左伝』宣公十二年「欒武子（晋の副将）曰（中略）（楚の荘王は）箴之〈兵士たちをいましめて〉曰、民生在勤、勤則不匱。」

⑬『史記』巻百二十一儒林伝「董仲舒（中略）以治春秋、（中略）蓋三年（中略）不観於舎園、其精如此。」・『漢書』巻五十六董仲舒伝・当該部『史記』と同文

⑭魏、何晏『集解』「包（咸）曰、礼儀与信、足以成徳、何用学稼以教民乎。」・朱憙『集註』「（北宋、楊時）曰樊遅遊聖人之門、而問稼圃。志則陋矣。」、

⑮現在の龔斌氏の『陶淵明伝論』（華東師範大学出版社二〇〇二）第七章第三節「四言詩の絶唱」は、「陶淵明は魏晋の四言詩復興時期における最高の成果をあげた詩人と評価できる」と称賛している。今後の検討課題であろう。

⑯「粛矣我祖」是個転捩点、像是大祭完畢、安歩跨出廟堂、這才喘過一口気覚得遍身軽鬆了一点。「厲夜生子　遽火而求凡百有心（下略）」開始是那様厳粛、幾乎窒死心跳、到這裏忽然破顔跟児子開起玩笑来、便這裏面空気顕得異常不調和。

（前茨城大学）